

北米の図書館学大学院留学、 大学図書館勤務を経験して

鎌 田 均

この文章は、2011年4月30日に同志社大学新町キャンパスで開かれた図書館ガイダンスで筆者が話した内容をまとめたものです。

筆者は1994年に同志社大学文学部文化学科、文化史学専攻（現在は文化史学科）を卒業し、また司書課程に在籍して司書資格を取得しました。そのころは学生ボランティアとして司書課程資料室に足繁く通っていたことを思い出します。在学中から、一度海外へ留学したいという思いがあり英語の勉強等をこつこつと進め、また司書課程で勉強をしているうちに、アメリカには図書館情報学の大学院が多くあるということを知り、大学卒業後の留学を考えました。色々と調べたところ、アメリカだけではなく、カナダにも図書館学の大学院があり、アメリカ図書館協会の認可を受けていると知りました。そして、カナダの大学のほうが学費が安くついた、という理由もあり、カナダのいくつかの大学院に入学を申し込み、カナダの総合大学の一つであるウェスタンオンタリオ大学の図書館情報学修士課程（Graduate School of Library and Information Science, the University of Western Ontario）に入学することになりました。オンタリオ州政府と大学の援助で、学費を州内出身の学生とおなじ額に下げてもらったのと、そのころの大幅な円高で、それほど出費が多くならなかったのは助かりました。

大学卒業後はしばらく同志社大学の図書館でアルバイトをさせてもらい、翌年1月の留学の準備を進め、1995年1月にカナダに渡りました。実はそれまでは一度も旅行等で海外に行ったことがなかったので、英語を勉強はしたものの、最初は英語があまりよく聞き取れないなど、大変な思いをしたことをよく憶えています。今後留学される方は、やはり海外旅行くらいは先にしておいたほうが良いと思います。また、その月には阪神淡路大震災があり、その頃はまだインターネット等が普及しはじめて間もないことだったので状況がよくわからず、またしばらくあとの地下鉄サリン事件等もあり、最初の学期はかなり大変でしたが、しばらくすると勉強、生活にも慣れてきました。

ウェスタンオンタリオ大学は、五大湖に面するオンタリオ州のロンドンという、アメリカ、ミシガン州の都市デトロイトとカナダ、オンタリオ州の州都トロントの中間に位

置する、そのころの人口が30万人位の小規模な町にあります。ロンドンの町には、本家のイギリスのロンドンと同じように、テムズ川という川があり、ハイドパークという公園があります。緑の多い、閑静な大学町です。ウェスタンオンタリオ大学のライブラリースクールは、ビルディングの独立した一角を占め、専用の図書館、学生ラウンジ等があり、充実した施設を持っていました。また、教員も15人ほどおり、充実した教育を受けることができたと思います。

私と同じ時期に入学してきた学生は大体30人から40人くらいで、多くの学生が年上で、何らかの職場で働いてきた経験をもつ人たちでした。私のように、大学を出て殆どすぐに入学する学生は少なかったようです。大学院での勉強は、海外で留学された人はお分かりでしょうが、たくさんのリーディング、小レポート等の課題が多く、それらをこなすのに殆ど毎日休みなく時間をとられました。クラス内では、ある特定の状況で、現場で起こりうる、または実際に起こった問題の解決について議論するという、ケーススタディーを用いたグループ学習、討議などが頻繁に行われました。特殊資料保存における、災害対策への備えなど、様々なケースがありました。ウェスタンオンタリオ大学ではビジネススクールが有名で、ケーススタディーを教育方法として重視していた影響もあって、ライブラリースクールでもケーススタディーが多用されていたようです。

ウェスタンオンタリオ大学のライブラリースクールを修了するには15科目を履修することが必要で、これは後から知ったことですが、一般のアメリカのライブラリースクールの12科目より多くなっています。必修科目として、図書館情報学概論、図書館経営、レファレンスサービス、資料組織、資料構築、情報技術、研究調査方法といったものがありました。選択科目には、デジタルライブラリー、大学、公共図書館などの館種別の科目、アーカイブ、資料保存、主題分析およびインデックシング、また現在では情報リテラシー教育と呼ばれる図書館利用教育の科目等がありました。とりわけ、そのころ広まりつつあったインターネット関連の授業は、その仕組みを理解し、実際にウェブサイト等を作成することなどができたことで有益でした。

学生は、それぞれが関心をもつ、または就職したい分野の選択科目を履修するのですが、Government Documents という政府刊行物関連の科目を履修する学生が比較的多かったのを憶えています。そのころは多くの学生が卒業後カナダ連邦政府、オンタリオ州政府内の図書館またはリサーチ関係の仕事などに就職することが多かったようです。そのころのカナダ経済、就職状況もそれほどよくなく、カナダでは大学の数も比較的少ないこともあり、大学、公共図書館の求人は比較的少なかったと思います。ウェスタンオンタリオ大学のライブラリースクールでは Cooperative Education Program と呼ばれる、学生が一学期のあいだ図書館関連の機関で、インターンとして働くことができる制度があり、やはり多くの求人は連邦政府、州政府の機関から来ていました。尚、ウエ

スタンオンタリオ大学のライブラリースクールはその後の大学組織改編を経て、現在は Faculty of Information and Media Studies に所属する形で続いています。

ライブラリースクールを卒業後、同じくカナダの、今度は西海岸のブリティッシュコロンビア州に位置する、ビクトリア大学のパブリックアドミニストレーション (School of Public Administration, University of Victoria) という専門の修士課程に入学することになりました。日本では同志社の政策学部のような、政策科学などと呼ばれる分野です。ここでの勉強は直接図書館とは関係ないので短くすませますが、公共、公的機関の経営、という面で図書館とつながる部分が多く、また、この修士課程プログラムにもあった Cooperative Education Program で、ブリティッシュコロンビア州政府や、州立の医療機関連合体でリサーチアナリストなどとして情報を扱う分野で実際に働くことができ、ここでの経験は以後の図書館の仕事にも役立てることができたと思っています。

ビクトリア大学在学中に、アメリカの、グランドキャニオンで知られるアリゾナ州にある、アリゾナ大学 (The University of Arizona) 図書館の日本研究担当司書に応募しました。最初は電話でインタビューを受け、最終選考に残ったということで、アリゾナ大学のあるアリゾナ州南部の町、ツーソン (Tucson) を二日間訪れ、インタビューを受けました。あらかじめ与えられたテーマで図書館のスタッフにプレゼンテーションを行い、図書館長を含む様々な人、グループと朝食から夕食まで会って、色々な質問を受け、話をする、という内容でした。色々な人とあまり堅苦しくなく、図書館の仕事、ツーソンでの生活などについて話ができて、この仕事に決まらなくても良い経験になったと思っていたところ、思いがけず採用の連絡が届いたので、まだ在学中でしたが、準備を整えて1999年6月からアリゾナに移り、仕事を始めることになりました。なお、ビクトリア大学の修士課程は、アリゾナ大学の仕事をしながら通信教育等のオプションを利用して、何回かはビクトリアに行かないといけませんでしたでしたが、2002年に修了できました。

こうして、北のカナダとうってかわって、今度はアメリカ南西部の砂漠に移ることになりました。アリゾナ大学のあるツーソンからメキシコの国境までは、車を運転して小一時間ほどで行くことができます。アリゾナ大学は町の中心部にある大規模な、医学部を擁する州立の総合大学です。図書館も大規模で、中央図書館に加え、理工学図書館、芸術学図書館、Center for Creative Photography という写真資料館があります。

先のインタビューの話に戻りますが、アメリカでは就職する際の履歴書を作る際、年齢、性別等の情報は載せる必要がなく、採用する側もそのような情報を評価に加味することを避けるようにしなければなりません。これは、私が後日採用する側にまわった際にも、人事から気をつけるように言われました。写真も履歴書につける必要はありません。司書を採用する場合でも、その人を見て、その人が必要な教育、経験を身につけて

いるか、職場に合う人材かどうか、ということで判断します。仮に採用担当の一人が志願者を個人的に知っている場合は、それが採用に影響しないように配慮します。アメリカでもビジネス等の一部の分野の非常に競争の激しいところでは、大学の評判によって就職に差がでるようですが、図書館の分野においては、もちろんライブラリースクールの評判というのがありますが、応募者が学位を取ったライブラリースクールの名前が採用に影響することは、私の経験ではありませんでした。

新卒採用を重視する日本とは違って、アメリカの図書館での司書採用は経験を重視する人が多いので、ライブラリースクールを出たての人がすぐにフルタイムの仕事を見つけるのはむずかしく、インターン、パートタイムの仕事など、なんらかの形で経験をつけておく必要があるようです。また、募集の際も、ただ司書を募集するのではなくて、レファレンスライブラリアン、システムライブラリアン、など特定の職種で募集し、その分野での教育、経験を積んだ人を採用します。採用された人は、基本的に採用された職種の仕事を、その分野の専門家として続けます。大学図書館では、主題ごとの専門分野別に図書館サービスを提供する、主題担当司書 (subject specialist librarians) を置いているところが多くありますが、例えば歴史学担当司書、音学担当司書、などといった人は図書館学の修士に加え、その担当主題の修士、博士を取得している人も多くいます。

私は、日本研究担当の専門司書として雇われましたが、アメリカには日本研究という日本の文化、政治、歴史、文学等を研究する分野をもつ大学があり、最近日本に永住することでニュースになったコロンビア大学のドナルド・キーンといった学者がよく知られています。アリゾナ大学も日本研究を持つ大学のひとつですが、大きいところでは、先の述べたコロンビア大学に加え、ハーヴァード、イエール、シカゴ、ミシガン、カリフォルニア大パークレー校などがあります。アリゾナ大学の日本研究は比較的小規模ですが、村上春樹の『海辺のカフカ』などの作品を翻訳したフィリップ・ゲイブリエルといった教員がいます。

アリゾナ大学図書館の組織は、図書館長を代表とするものの、いわゆるチーム型の組織とよばれる、組織内の階層を少なくした形式で形成され、一般のスタッフの意見、考え等が図書館経営に反映されやすいようになっています。図書館長は学内の学部長と同じ待遇で、図書館を代表して大学全体の運営に参加します。一般にアメリカの大学図書館長には、一般の教員が任命されることが多い日本と異なり、図書館で経験を積んできた司書がなります。多くの場合、学長、学部長などの大学のトップのポジションと同様に、公募で広く全国から人材を募ります。同様に図書館内の各種の司書のポジションも、大抵の場合公募します。こうして図書館司書は全国から集まってきますが、アメリカの多くの職場と同様、ある程度の期間を経ると、より自分に適した職場、より高給の仕事、

より望ましい生活環境など、仕事上または生活上の理由で他の職場に移ることはふつうです。

私個人の、アリゾナ大学での日常の仕事では、自分の担当分野でのレファレンスサービス、教員との連携、利用者教育、資料構築、目録作成など様々な業務をこなしましたが、加えて、図書館全体での長期経営戦略の策定、図書館資料予算の編成、図書館サービス評価といったさまざまな業務、プロジェクトを担当しました。最近では、日本研究に加え、経営学、政治学などの主題分野の情報資料構築を担当し、図書館全体での資料構築運営にも携わりました。

アリゾナ大学図書館では、司書はテニユア (tenure) と呼ばれる、大学教員に保証された終身雇用権を手に入れ、大学教員とほぼ同等の待遇を得ることができます。アリゾナ大学では、新規に採用された司書は6年目でテニユアを得るための審査を受け、職場での仕事の実績だけでなく、図書館関連協会などでのさまざまな委員会などへの参加、また図書館関係の論文等の執筆、発表などによって評価され、図書館内だけでなく、外部の人間の意見も求めます。論文に関しては、査読制度をとっている雑誌などに掲載されれば、評価が高くなります。幸い、私は無事に通過することができましたが、もしこの審査に通らなかった場合は、一年以内に退職となり、他の職場を探す必要があります。このテニユア制度を導入している大学図書館は、州立大学に多く、私立大学ではあまりみることはないようです。

アリゾナ大学の図書館組織は、この図書館学修士の学位をもつ、テニユアを持つ、もしくはテニユアを得る権利がある司書と、一般の職員とで構成されています。司書はレファレンスサービス等司書の専門とされる業務を担当し、一般のスタッフは貸出カウンター業務、相互貸借リクエスト処理等の業務を担当します。この司書の専門性を維持するため、またテニユアを取得するためにも、図書館関係の協会等の会議、大会に参加し、専門知識と能力を深め、発表等をすることは重要です。アメリカ図書館協会に代表される各種の協会があり、アメリカ図書館協会内部の、大学図書館、公共図書館などの部会、またアメリカ図書館協会以外の、例えば美術関係の司書の協会、音楽関係の司書の協会等さまざまな組織があります。アメリカ図書館協会の年次大会はかなり大規模で、シカゴ等の大都市の大半の主要ホテルをおさえ、1万人をこえる数の司書が集まり、町中が司書であふれかえっているような独特の雰囲気を感じました。

全国区のアメリカ図書館協会に加えて、全米の各州にも図書館協会があり、アリゾナ州にもアリゾナ図書館協会があります。アリゾナ図書館協会は、ホーナーフェローシップ (Horner Fellowship) という図書館司書の交流プログラムを日本図書館協会と運営しており、一年交代で、アリゾナ州から司書を日本に派遣し、また日本から司書を受入れています。数週間アリゾナに滞在し、自分に関心のある分野の図書館を中心にアリ

北米の図書館学大学院留学、大学図書館勤務を経験して

ゾナのさまざまな図書館を見学し、またアリゾナの自然、文化を体験できるよい機会だと思いますので、このプログラムの運営にアリゾナ側から携わってきたこともあり、宣伝を兼ねてお話しさせていただいて、本日の私の話を締めくくりたいと思います。

(かまだ ひとし。アリゾナ大学図書館司書)